

違った、文様の基本台帳に従い熟知した彫刻工人の存在が考えられる。同一の文様を施した軒先瓦・梵鐘撞座・上帯下帯の文様は、同一的組織及び工人関係による工作であり、宝相華文様を基調とする方向性が定められたのではなからうか。それらは天台寺という寺院建築の起因によって製作・展開されたものと想定され、観世音寺鐘・京都妙心寺鐘は天台寺と直接的関与が指摘できる。ちなみに京都妙心寺鐘は妙心寺建立時期からして合致せず、伝世されたものであろう。

以上のことから、京都妙心寺鐘の銘文より「糟屋評造春米連」が梵鐘鑄造に関与し、六九八年に鑄造されたことは前述したとおりである。兄弟鐘の比較では、観世音寺鐘が勇壯で力強い創作との指摘があり、内面窺書きの「上三毛」は、戸籍断簡に見える「上三毛郡塔里」の秦部・勝姓達、渡来人の存在を十分裏付けるものと推考される。また、豊前国所管の天台寺は、伽藍配置が金堂を中心に、中門から講堂へ回廊が巡る形式で、当初から塔は存在していない。塔跡は回廊より後出することが明らかである。つまり、仏像を安置する「金堂」を優先させて建立されている。このことは、新羅渡来人たちの綿生産・銅鋳業を中心に、生活基盤の「祈り」の寺院として、更には、彼ら自身のための宗教寺院として、天台寺を建立した可能性も考えられよう。そこに創作された屋瓦は、我が国でこれほど優美な軒先瓦はなく、新羅系文様そのものであり、彼らの技術の高さ

を「瓦・梵鐘」に見ることが可能である。参考ではあるが、天台寺の伽藍配置は、朝鮮三国時代の寺院伽藍（聖住寺第三期伽藍）に類似しており、我が国の他遺跡に類似例を見ない。

第二節 仏教と造寺活動

一 寺院の機能と構成

寺院設計

寺院の造営にあたっては、寺域の設定はもちろんのこと寺の設計図等が作成され、更に寺の機能や寺院構成も整備されていた。

寺院には基本的に三つの機能が示されている。

- (1) 定められた伽藍において、仏教の教えに基づいた思想を拡大し、寺院内で儀式を執り行うこと。
 - (2) 儀式の中心となる建物は、塔・金堂であること。
 - (3) 寺院内での僧侶の日常生活基盤である。中心建物は僧坊・厨・食堂・温室などであり、規律正しい作法により生活が営まれる。
- (3) 寺院の運営である。それには寺院を支える経済的な面と維持・管理を行う機能である。経済的には寺田、封戸があり、その面積が寺の大きさを象徴していた。維持・管理は政所や大衆院などの組織がこれにあたり、

寺院すべての機能を果たした。
 ただし、これらの機能は都城における寺院の機能であって、地方においては必ずしも全ての建物等が設置されていたわけではない。それらの機能を果たすため多くの建物が存在する。延喜五年に作成された「観世音寺資財帳」には次の建物が記されている。

堂	宇	延喜五年
南大門		
中門		
五重塔		
金堂	破損	
講堂		
鐘樓		
経蔵		
大房	破損	
小子房二棟	板葺建物無	
馬道屋		
客僧坊二棟	内一棟無	
門屋	破損	
堂(菩薩院)	破損	
堂(戒壇院)		
礼堂	無	
東門屋		
西門屋		
温室屋	無後新築	

堂	宇	延喜五年
北厨		無
西厨		
竈屋		大破
水屋二		草葺建物無
備屋		大破
碓屋		無
東方板倉		新造
南方板倉		
造瓦屋二		草葺建物無
屋		小破
東板倉		小破
第二板倉		
西第二板倉		
第五亀甲倉		破損
厠		小破修理
西第北板倉		破損
西方間屋		

また、法隆寺は「金堂・塔・講堂・中門・南門・東門・僧坊・回廊・厨・竈屋・政屋・碓屋・稲屋・木屋・客坊・温室・倉」などが資財帳に記されており、総数三五口の建物があつたことが分かっている。

このように、畿内における法隆寺と、地方寺院である観世音寺を比較すると、観世音寺は、延喜五年ごろには一九の堂宇が存在したことが伺える。さらに、大衆物草・温室物草等の付属建物を総合すると、法隆寺の三五宇や四天王寺の三七宇と同等の堂宇を呈しており、観世音寺が地方寺院としては破格の寺院規模であつたことが伺える。また、その他の地方寺院はこのような三〇宇程度の建物を有していたわけではなく、塔・金堂・講堂と、僧侶が生活に困らない程度の堂宇が存在していたものと推察される。

さて、これらの諸建物を建築するにあたっては、寺域の選定から行われ、基本設計図を作成し、寺院造営が行われた。現存する最古の寺院計画図は、正倉院に納められている『東大寺講堂院図』で天平勝宝八年(七五六)のものである。この絵図は伽藍全域を一〇尺方眼に区分し、講堂・僧坊・食堂・鐘樓・経蔵等が描かれたものである。都城内の寺院は、基本設計に基づいて区画された条里制の中に、一町一三五尺を基準として建設されたが、地方寺院の場合はそれらの例が少なく、寺域を何らかの構築物で区画されるのが一般的であつたようである。

畿内地方の寺院の例を見ると、その大部分が築地塀であり、八世紀中ごろになると、土塁や掘立柱更には溝等によって区画された寺院も少なくなる。例として武蔵国分寺跡や陸奥国分寺跡などが挙げられ、豊前地方では垂水廃寺跡に、築地の一部が発見されている。寺院建設計画もその地方の財政状況や経済的基盤によって、寺院規模・構造等の様相が変化していった。

伽藍の構成

近年の文化財発掘調査によって寺院の配置が明らかになりつつあり、従来から定説化されていた主要寺院伽藍配置が訂正・追加されるケースが出てきている。畿内では山田寺・大宮大寺等は新たな配置型式がとられ、筑前観世音寺では平成十六年の発掘調査で、現講堂礎石は創建当初のものと誰かが疑いを示さなかったものが、礎石より下に根石が発見され、講堂は建替えされていることが判明した。更に、講堂と回廊の取り付きが訂正されることになった。

齊藤忠の『新版 仏教考古学講座』第二巻寺院によると、我が国における寺院伽藍配置を、「塔」の位置及び塔数により分類されている。それによると一塔・二塔・無塔に分かれる。

1 一塔

- ・四天王寺式：中門・塔・金堂・講堂が南北方向に一直線に並び、中門と講堂を回廊が結ぶ伽藍配置。
- 類例―椿市廃寺（行橋市福丸）
- ・法隆寺式：方位を南北方向にとり、中門と講堂を回廊が

結び、その内側に西に塔、東に金堂を配置する。

類例―虚空蔵寺（宇佐市山本）

- ・川原寺式：伽藍中軸線上に南大門・中門・中金堂・講堂が並び、中門から巡る回廊は中金堂に取り付く。回廊内には東に塔、西に東面する金堂を配する。

この一塔を有する寺院タイプは多く、八世紀代の国分寺伽藍及び平安時代の寺院に至るまで存続する。飛鳥寺も一塔であるが、他の寺院と異なり、塔を中心に東金堂・西金堂・北金堂が取り囲む型式である。類例に、朝鮮高句麗の清岩里廃寺がある。また、川原寺式伽藍配置の回廊内における塔と金堂の配置は、筑前観世音寺に類似する。

2 二塔

- ・薬師寺式：寺院中心に南大門・中門・金堂・講堂が並び、中門から巡る回廊は講堂に接続する。金堂の左右には東塔・西塔が配される。
- 類例―百濟廢寺（大阪府）、新治廢寺（茨城県）
- ・東大寺式：中門の北側に金堂・講堂を配する。塔は伽藍の外側左右に東西両塔が配される。
- 両塔を配する寺院は、古く新羅に多く見られ、中国の隋・唐の影響を受けたとされている。また、東大寺式伽藍は、塔が回

廊から外に配される特徴を有する。両塔は存在しないが塔が回廊外になる型式は、以後国分寺に多く見られるようになる。

3 無塔

・中門から巡る回廊は、金堂に取り付く場合と講堂に取り付く場合とがある。これらの多くは八世紀代になって建立される、国分尼寺に多く見られるものである。

これらの寺院配置構成は、各時代によって変遷し、同一時代においても朝鮮三国時代の影響下の寺院や、発願者の建立趣旨において各形式があり、寺院建築の内容を一層複雑にしている。

このような伽藍配置が変化する理由に、塔は礼拝の象徴であり、釈迦に通じる建物であるとされ、金堂は後の位置を保っていたが、法隆寺建立ごろから塔と金堂は東西並列に変わり、塔・金堂ともに釈迦と相等しく、釈迦こそ仏教の心であるとされるようになる。そこには聖徳太子の仏教思想が強く打ち出されていると言える。

また、初期の仏教寺院から平安時代になると、寺院は奈良時代から引き継がれた伽藍配置をもつものの、空海や最澄など僧侶の出現によって、新たな仏教思想の展開が始まり、寺院は平地から山岳へと移っていくようになる。もとより山岳に占地した寺は奈良時代から存在するが、本格的な山岳寺院と認められるのは、比叡山延暦寺や高野山金剛峰寺が代表されるものであ

る。

二 地方寺院の出現

造寺の広がり

仏教が公伝された以後は、蘇我氏が飛鳥^{まかみがはら}真神原に、我が国最初の本格的寺院である法

興寺（飛鳥寺）を建立する。寺の造営は九年かかり、推古天皇四年（五九六）に完成した。前章で記したように、『日本書紀』によると推古天皇三十二年には全国に四六か所の寺が存在し、それから六九年経った持統天皇六年（六九二）には五四五か所の寺々が存在したという。畿内を中心とした寺院数であろうが、約十数倍の増加傾向である。

まず、初期寺院の造営について見てみよう。

飛鳥寺と時期を同じくして、北部九州に西暦六〇〇年前後の初期瓦が生産されている。この瓦は瓦陶兼業窯で焼成されたもので、本格的な瓦製作技術によるものでなく、技術的に稚拙さが認められる。生産個所は大きく筑前地区と豊前地区に分かれ、両者の特徴が瓦に見受けられる。

・筑前地区

各遺跡の出土瓦の種類は、軒丸瓦・丸瓦・平瓦・熨斗瓦・鴟尾等が出土し、平瓦が圧倒的に多い。

軒丸瓦については、神の前窯跡、月の浦窯跡、惣利遺跡、那珂遺跡において発見されている。瓦当が無文の軒丸瓦は、神の